

識別番号 P4

研究課題 人間言語にみられる助動詞を用いたモダリティ表現の普遍性

研究代表者 秋庭大悟（国際言語情報研究所）

Summary This aim of this project is to provide a theoretical account for the ambiguity of the interpretation of modal auxiliaries which is observed cross-linguistically. Based on the phase theory (cf. Chomsky 2000, 2001 among others), we propose the ambiguity derives from the difference of the position at which they are interpreted in the syntactic structure and seek to explain the role of modality in the human language, especially at the syntax-semantics interface.

1. はじめに

以下の例が示すように英語の法助動詞は認識的解釈（EM）と根源的解釈（RM）の2つの解釈を持つことが知られている。

(1) John must go to the party.

- a. ジョンはパーティに行かなければならない。（EM）
- b. ジョンはパーティに行くに違いない。（RM）

EMは発話された命題の真偽値に対する話者の判断を表しており、RMは義務や許可、可能などの意味を表す。法助動詞の持つこうした多義性は英語だけではなく多くの言語で観察されている。通言語的に助動詞が同様の多義性を持つことは偶然とは考え難く、この多義性の背景には人間言語に共通する普遍的な要因があると思われる。当研究では生成文法の枠組みにおいて1990年代以降に発展してきた極小理論に基づいて、そうした要因を解き明かすとともに、法助動詞の関わる文法現象に理論的な説明を与えることを目的とする。

2. 極小理論の概要（詳しくは1990年代以降のNoam Chomskyの著作を参照）

1990年代以降生成文法の枠組みの中で発展してきた極小理論では、統語部門で作られた構造が音韻部門と意味部門へと送られ、それぞれの部門で、統語部門で作られた構造をもとに、音の情報や意味の情報が与えられると考える。Chomsky(2000,2001)では統語部門における派生の単位としてフェイズ（CPとvP）を提唱し、構造がフェイズ単位で作られると仮定する。また、近年、統語部門から音韻部門・意味部門への情報の転送もフェイズごとになされていると考えられている。

3. 法助動詞の解釈とフェイズ理論

法助動詞が解釈によって異なるふるまいを見せる主な現象を以下（2）にまとめる。

- (2) a. 語順：多くの言語で多義的な法助動詞がC位置に現れた際にEM、v位置でRMの解釈のみを受けるようになる例が観察されている。
- b 作用域：EMとRMは作用域が異なる。
 - i) EM > 時制(T) > RM EX) John could go to the party.

ii) EM > TP 付加副詞 > RM EX) In general students must study hard.

iii) EM > 数量詞 (TP 付加) / RM > 数量詞 > RM

EX) Everyone must win the prize in the lottery.

c. 多重法助動詞構文：助動詞を1文内に2つ以上使用できる言語において、構造的に一番高い位置にある助動詞のみがEMの解釈を受ける。

EX) He should can go tomorrow. (Brown 1991:74 スコットランド方言)

d. VP 削除：VP 削除構文に現れる法助動詞はRMの解釈しか持たない。

EX) John must go to the park and Bill must, too.

e. コントロール：ある種のコントロール構文で法助動詞はRMの解釈しか持たない。

EX) The books must be sold without reading them.

当研究ではEMとRMのこうした振る舞いの違いに関して、上記aとbよりEMはCPフェイズ内で解釈を受け、RMはvPフェイズ内で解釈を受けるのではないかという仮説を立てる。このように考えると、通言語的に観察される法助動詞の多義性が2つに限定されているのは、フェイズの種類がCとvの2つであることから説明される。

また、Chomsky(2001)ではフェイズは「命題的である」と述べられ、CPフェイズは文全体の命題をカバーし、vPフェイズは動詞とその項(主語・目的語)との関係を表わすとされている。ここで(1)の英語のmustの意味を考えてみると、EMのときは「ジョンがパーティーに行く」という命題全体に対して話者がそれが起こるのが「必然」であるとしており、RMのときは「ジョン」が「行く」という述語の主語となることが「必然」であることを表わしている。つまり、法解釈とはフェイズ単位で統語部門から意味部門へと情報が送られる際に、その「確かさ(必然性や可能性の度合い)」に関する情報を付与するものとして機能していると捉えられる。

3. まとめ

当研究では、通言語的に観察される法助動詞の持つ多義性をフェイズ理論の枠組みの中で説明し、(2)に示したものはじめとする法助動詞がEMとRMそれぞれの解釈をとるときで異なるふるまいを見せる現象を説明することを目指している。

参考文献

Chomsky, Noam. 2000. "Minimalist Inquiries." In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Cambridge; MIT Press.

Chomsky, Noam. 2001. "Derivation by Phase." In Michael Kenstowicz, (ed.) *Ken Hale: A life in Language*. Cambridge; MIT Press. 1-52.

Brown, Keith 1992. Double modals in Hawick Scots. In P. Trudgill and J. K. Chambers (eds.) *Dialects of English: Studies in grammatical variation*. London: Longman. 74-103.